

第36回海外子女文芸作品コンクール「地球に学ぶ」

優秀作品「作文」の部

プラハ日本人学校 小学部3年 中川美空

『勇気をくれたプラハ』

「ねえねえ、ここに数字が書いてあるよ。」

「ほんとだあ！！これで、せいヴィート大せいどうの前の、いどのふかさとはばが分かったね。」

プラハ日本人学校では、毎年、プラハ市内のウォークラリーを行っています。五、六人のグループで、学校を出発してトラムにのったり、パスにのったりして、ウォークラリーの場所まで行きます。そこで、グループのみんなときょう力して問題をといていきます。グループに一人、先生がついてきてくれますが、たよることはいっさいできません。たとえば、まちがった方に歩いて行っても、何も教えてくれず、ただついて来てくれるだけです。だから、学校を出発してもどってくるまで、ぜんぶ自分たちでやることになります。

わたしが一年生のとき、二年生といっしょのグループで、ウォークラリーに行きました。そのとき、二年生のリーダーさんが、トラムをおりるとき、

「次のていりゅう所でおるからね。」と、早めにわたしたちに教えてくれたり、ウォークラリーの問題を読みながら

「次は、このしゃしんの場所をみんなでさがそうよ。」と、知らせてくれたりしました。それを見てわたしは、「リーダーって、かっこいいな。」と思いました。

そして、二年生のウォークラリーのグループぎめのとき、「リーダーをやってみたい。」と思いました。思いきって手をあげてリーダーになりました。「きょう年のリーダーみたいに、たよれるリーダーになるぞ。」とっていました。でも家に帰って来たら、きゅうにふ安になってしまいました。なぜかというと、トラムに子どもだけでのったことがなかったので、のったりおりたりする場所もよく分からなかったからです。「やっぱり、リーダーをやめようかな。」と思ったけれど、友だちが、

「分からなくなったら、ぼく教えてあげるよ。」と言ってくれたし、先生も、

「ちょうせんしてみたら？」

と言ってくれたので、「やっぱりがんばろう」とゆう気が出ました。

当日にむけて、わたしはウォークラリーの問題を見ていたら、二十までチェコ語で数えましょうという問題がありました。わたしは、「リーダーだから、言えるようにしようかな。」と思いました。そして、お母さんに分からないところを教えてもらいながら、がんばってれん習しました。当日、みんなで、

「イエデン、ドゥバ、トゥシ・・・デセット。」と、十まで声を合わせて言いました。だけど、「えっ、十一ってどう言うのか分からない。」

「チェコ語だと十までしか言えない。」

「二十までなんてむりだよ。」

と、みんなが十までしか言えなくてこまっていたので、

「わたしが言うのに合わせてみて。」と声をかけ、みんなで大きな声で言っていたら、二十まで言えることができました。わたしは、れん習のせいかを出してみんなを引っ張ることができたので、とてもうれしく思いました。

また、ほかの問題を考えると、一人じゃアイデアがぜんぜんうかびませんでした。でも、みんなが、

「ここはこうだから、ぼくはこう思う。」

「え、わたしはちがうと思うな。だって……。」と、アイデアをたくさん出してくれたので、みんなときょう力して、問題をかい決することができました。わたしはリーダーでしたが、一人じゃできないことも、みんなでたすけ合うことの大切さも分かりました。

わたしはリーダーをやってみて、こまっている人を、自分からたすけることができました。ぎゃくに、みんなにたすけられることもありました。わたしには、ほいく園の先生になりたいというゆめがあります。ほいく園の先生にも、リーダーの力がひつようだと思います。もし、しょうらい、このゆめがかなえられたら、このプラハでの体けんがきっかけになったと思います。そうじゃなくても、こんなすてきな体けんをさせてくれたプラハ日本人学校に、「ありがとう」の気持ちでいっぱいです。わたしは、来年日本に帰ります。でも、もっと、ゆめをおいかけたり、リーダーになったりするたびに、このプラハ日本人学校のことを、思い出すとします。プラハですごした三年間は、わたしにとってかけがえのないたからものです。